幼児のタイプ A 特性と要求水準

——要求水準の基本的特徴とリスク・テイキングならびに競争事態におけるその変化¹——

大阪青山短期大学 山 崎 勝 之

Type A personality and level of aspiration in preschool children: Some basic characteristics of aspiration levels and their modifications by introducing risk-taking and competitive situations

Katsuyuki Yamasaki (*Department of Children's Education, Osaka Aoyama Junior College, Minoh, Osaka 562*)

The purpose of this study was to investigate some characteristics of aspiration levels of Type A preschoolers. Twenty-two Type A and twenty-one Type B subjects selected from 245 preschoolers were given three tasks: ball-throwing task 1, ball-throwing task 2, and ringtoss task. After investigating some basic characteristics of aspiration levels in a standard situation (ball-throwing task 1), risk-taking (ball-throwing task 2) and competitive (ringtoss task) situations were introduced in order to study the modifications of aspiration levels. The results indicated that Type A children showed higher aspiration levels than Type B children, but that no differences of changes in aspiration levels by introducing risk-taking and competitive situations were found between the two types. These results were discussed from the view point of formation of Type A characteristics.

Key words: Type A, coronary-prone behavior, aspiration level, preschoolers, competition, risk-taking.

冠動脈性の心臓疾患の心理・行動的危険因子として Type A 特性の存在が指摘され (Friedman & Rosenman, 1959), 現在に至るまで数多くの研究がなされている。Type A 特性を強くもつ Type A 者は様々な性格・行動特徴を示すが、一般的には、攻撃と敵意、時間切迫と焦燥、競争性をともなった達成努力、これら 3 つの下位特性を強くもつ者をさしている。Type A 者とは対照的に、これらの特性が弱い者が Type B 者と呼ばれる。

冠動脈性の心臓疾患が中年期以降に生まれる疾患だけに、Type A の研究は成人を対象にすることがほとんどであったが、最近子どもを対象とした研究が目だつようになってきた。これは、Type A の形成過程を明らかにし、Type A の予防と矯正に寄与しようとすることから生まれた研究の流れであろう。

発達的研究では、子どもと成人の Type A 特性の類似性が問題にされることが多いが、成人に認められる Type A 者の特徴が子どもでは認められないことも少なくない。たとえば、Ovcharchyn, Johnson, & Petzel (1981) と Snow (1978) は成人の Type A 者に Type B

者よりも高い要求水準を確認しているが、Kliever & Weidner (1987) では 9 歳から 12 歳の子どもで Type A 者の要求水準の高さを確認できなかった。要求水準の高さは Type A 者の示す特徴のなかでも中心的なもので、Type A 特性の発生当初から認められてよい特徴だと考えられる。それにもかかわらず、要求水準に関する発達的研究は数の上から言ってもまったく不十分な状況にある。とくに、Type A 特性は幼児期に生まれ始めることが指摘されているが (Corrigan & Moskowitz, 1983; Matthews & Angulo, 1980), この幼児期での研究は見あたらない。

そこで本研究では、Type A における要求水準の発達的研究が十分でない状況に基づき、Type A 特性が生まれ始める幼児期の子どもで、Type A 児の要求水準の特徴をいくつかの実験事態で調べてみた。

まず、第 1 の事態では、過去の研究に従い (たとえば、Snow, 1978) 一般的な要求水準実験事態を用いて Type A 児の基本的な要求水準の特徴を調べた。第 2 の事態では、失敗危険性の要因を導入し、失敗の危険性が高まるが、成功するとより大きな成功値が得られる場面を、Type A 児がどの程度選択するかを調べてみた。そして第 3 の事態では、競争性の要因を導入し、競争性によっ

¹ 本研究は平成 2 年度文部省科学研究費 (奨励研究 A, 課題番号 02710069) の補助を受けた。

て Type A 者の要求水準がどのように変化するかを検討した。競争性への鋭敏さは Type A 者の特徴のひとつであるが(たとえば, Gastorf, Suls, & Sanders, 1980), Type A 児の要求水準が競争性によって大きく影響を受けることが考えられる。

方 法

Type A 質問紙の実施 幼稚園の担任 8 名(全員女性)が、幼児用の Type A 検査である日本語版 MYTH 検査(Matthews Youth Test for Health; Matthews & Angulo, 1980)で、担当している幼児について検査を実施した。日本語版 MYTH は日本の幼児を対象に信頼性と妥当性が確認されている検査で(山崎・菊野, 1990), 米国版同様, 17 項目からなる他者評価検査となっている。また, MYTH では, 全体の Type A 得点のほかに焦燥・攻撃性と競争性の下位 2 尺度の得点を算出することができる。検査の結果, 4 歳児(年中), 男児 61 名, 女児 60 名, 5 歳児(年長), 男児 59 名, 女児 65 名, 合計 245 名の幼児の Type A 得点が得られた。

被験児 上記の幼児から実験を受ける被験児を選出したが、選択は全体の Type A 得点の平均値(49.97)から上下 1 SD (7.39)に入らないという条件で無作為におこなわれた。この結果, Type A 群として男児 11 名(4 歳児 5 名, 5 歳児 6 名), 女児 11 名(4 歳児 7 名, 5 歳児 4 名), 合計 22 名, Type B 群として男児 11 名(4 歳児 5 名, 5 歳児 6 名), 女児 10 名(4 歳児 3 名, 5 歳児 7 名), 合計 21 名の幼児が被験児として選ばれた。Type A 群は Type A 得点が, 58—70 点, 平均 61.18 点, Type B 群は 30—42 点, 平均 37.14 点であった。

実験課題 (1) ボール投げ課題 1 この課題では, 8 個のボール(ビニール製, 直径 58 mm)を 1.4 m 離れた箱(270×270×380 mm)に投げ入れることがもとめられた。8 個のボール入れを 1 試行とし, 7 試行実施し, 毎試行前に“次はいくつ入れることができると思うか”とたずね, 要求水準を確認した。この要求水準の確認はすべての課題で同様に実施した。(2) ボール投げ課題 2 課題 1 と同様に 4 試行実施する。しかし, この課題では, 3 つの箱が用意され, それぞれ箱までの距離が異なっていた(0.9 m, 1.4 m, 1.9 m)。各箱については, 前の箱(課題 1)より“近いから簡単”(0.9 m), 前の箱と“同じ”(1.4 m), 前の箱より“遠いから難しい”(1.9 m)と説明し, 遠い箱に入れるほうが成功値が高いことを間接的に知らせた。被験児は各試行開始前に 3 つの箱のうちいずれかひとつを自由に選択した。なお, 課題 2 で 4 試行まで試行数を減らしたのは, 本課題の遂行に時間を要し, 幼児の注意と興味を持続できないからである。(3) 輪投げ課題 ここでは被験児の興味を持続するため, 課題を輪投げにかえ, 8 個の輪(直径 135 mm)を 1 m 離

れた棒(高さ 400 mm)に入れさせた。8 個の輪投げを 1 試行とし, 6 試行実施した。ここでは, 3 試行開始前に, “8 個の輪を全部入れる子どもがいる”と明確に 2 回言葉をかけをおこない競争性を導入した。

ボール投げ課題 1 は基本的要求水準確認のため, ボール投げ課題 2 は失敗危険性と要求水準の関係をみるため, そして輪投げ課題は競争性の導入による要求水準の変化をみるために設けられた。

手続き 実験に入る前に数の理解についての質問をおこない, 本実験で扱う数が理解できることを確認した。実験に入ると被験児は個別に上記の順で 3 つの課題を受けた。また, いずれの課題も実施前には実験者が説明をしながら, 1 試行分の見本を見せている。さらに, 各試行後には実験者が入ったボール(輪)を数え, 被験児に知らせた。記録については, これらの記録はできるだけ被験児に気づかれないようにおこなった。なお, 実験者と記録者は女性で, 実験時には子どもがどちらの群に属するか知らされていないかった。

結 果

ボール投げ課題 1 Figure 1 にはこの課題での結果が群ごとに, Snow (1978)に従って, 遂行成績(a), 要求

Figure 1. Mean scores of Groups A and B in the first and second sessions of Task 1 (a: performance b: aspiration c: attainment discrepancy d: goal discrepancy).

水準 (b), 達成差 (c: attainment discrepancy, AD), 目標差 (d: goal discrepancy, GD) の平均値で示されている。AD はある試行の要求水準とその試行の遂行成績との差を示し, GD はある試行の要求水準とその前の試行の遂行成績との差を示している。また, 図では前半 (a, b, c では最初の 4 試行分, d では最初の 3 試行分) と後半 (a, b, c, d すべて最終の 3 試行分) 別に平均値が示されている。このように前半と後半に分けたのは, 課題遂行能力の確認にともなう要求水準の変化をとらえるためである。

それぞれの測度で, 群 (Type A と B) と試行 (前半と後半) の 2 要因の分散分析を実施したところ, 遂行成績では群の主効果, 試行の主効果ならびに群と試行の交互作用はいずれも有意にはならず (すべて $F < 1$, $df = 1/41$, $p > .05$), 遂行水準も全体的に低い値をたもっている。他方, 要求水準と AD では群の主効果 (順に, $F = 1.83$, 2.12 , とともに $df = 1/41$, $p > .05$) と試行の主効果 (いずれも $F < 1$, $df = 1/41$, $p > .05$) は有意にはならなかったが, 両測度で群と試行の交互作用が有意になった (順に, $F = 4.56$, 4.35 , とともに $df = 1/41$, $p < .05$)。下位検定の結果, 両測度とも試行後半においてのみ, A 群と B 群の間に有意差が認められた (順に, $t = 2.33$, 2.34 , とともに $df = 41$, $p < .05$)。この結果は, 遂行成績に差がないにもかかわらず

ず, 試行後半において Type A 児の要求水準が Type B 児よりも高くなっていることを示している。GD についても図から同様の傾向が認められるが, 統計的にはいずれの効果も有意ではなかった。

ボール投げ課題 2 3つの距離のなかで, その距離をもっとも多く選択した被験児の人数を群ごとに出してみると, 0.9 m, 1.4 m, 1.9 m の順に, A 群では 9 名, 9 名, 4 名, B 群では 8 名, 10 名, 3 名で, 群と距離の間には有意な連関は認められなかった ($\chi^2 = .26$, $df = 2$, $p > .05$)。また全 4 試行の総平均値でも, 遂行成績, 要求水準, AD, GD のいずれの測度においても両群に有意な差は認められなかった (遂行成績 $t = 1.65$, その他 $t < 1$, すべて $df = 41$, $p > .05$)。また, 同様の分析を距離ごとにおこなった場合でも, 群間の有意な差はどの測度においても認められなかった。ここには, Type A 児が失敗の危険性の高い事態に果敢に挑戦する姿は認められない。

輪投げ課題 Figure 2 には Figure 1 と同様に 4 測度についての平均値が群ごとに示されている。Figure 2 の試行区分は Figure 1 とは異なり, 競争性の誘導前後で試行が分けられている。

それぞれの測度について, 群 (Type A と B) と試行 (誘導前後) の 2 要因の分散分析をおこなった結果, 遂行成績では群と試行の主効果ならびに群と試行の交互作用はいずれも有意にはならなかった (試行の主効果 $F = 1.17$, その他 $F < 1$, いずれも $df = 1/41$, $p > .05$)。要求水準については, 群の主効果のみが有意で ($F = 4.05$, $df = 1/41$, $p < .05$), 試行の主効果ならびに群と試行の交互作用は有意ではなかった (順に, $F = 3.87$, $F < 1$, とともに $df = 1/41$, $p > .05$)。AD については群と試行の主効果が有意で (順に, $F = 4.52$, 4.60 , とともに $df = 1/41$, $p < .05$), 両者の交互作用は有意ではなかった ($F < 1$, $df = 1/41$, $p > .05$)。GD については群の主効果のみが有意で ($F = 4.07$, $df = 1/41$, $p < .05$), 試行の主効果ならびに群と試行の交互作用はいずれも有意ではなかった (順に, $F = 1.77$, $F < 1$, $df = 1/41$, $p > .05$)。ここでも, すべての試行を通じて, Type A 児の要求水準の高さが確認されるが, 要求水準は競争性の導入には影響されず, むしろ, 低い遂行水準に影響を受けて試行後半で低下していくように見受けられる。

考 察

Type A 児の要求水準の高さはボール投げ課題 1 と輪投げの両課題において認められた。特に課題の難易度が高い輪投げ課題で Type A と Type B 児の差がより大きくなり, 実際の低い成績を考慮せず, あるいはその低い成績を埋め合わせるかのように高い要求水準を維持する Type A 者の姿 (Price, 1982) がここにあらわれている。

Figure 2. Mean scores of Groups A and B in the sessions before and after introducing competition in Task 3 (a: performance b: aspiration c: attainment discrepancy d: goal discrepancy).

しかし、この要求水準は競争性の導入によって変化しなかった。Type A の形成については、親の愛情や注意を得るため、あるいは子どもが自分自身の存在価値を証明するために (Price, 1982), 具体的な結果を求めて努力しはじめ、Type A 特性を獲得するという仮説がある (Friedman & Ulmer, 1984; Yamasaki, 1990)。この仮説から考えると、Type A 者の要求水準の高さはその形成の最初から認められてよい。本実験の結果は幼児の要求水準の高さを確認し、このことを証明している。しかし、競争性への鋭敏さはその後他者との交わりの中で培われるものであり、その形成が遅れることが予測される。本実験結果は、Type A 特性が生まれて間もない幼児期には、Type A 者の B 者をしのぐ競争性への鋭敏さが認められず、この見解に合致した結果とも受け取られる。

しかし、本実験のような単なる言語上の操作ではなく、実際に他者の存在を設定した競争性を明確に導入して、この点をさらに検討する必要がある。また、幼児期から児童期初期の子どもを年齢ごとに調べ、競争性による要求水準への影響の変化を細かくとらえる必要もある。

最後に、要求水準と失敗危険性選択との関係が認められなかったことにふれておきたい。この内容については過去に研究はないが、Type A 者が失敗の危険をおかしてもよい成績を得ようとすることも十分に考えられる。本実験では教示内容 (失敗危険性と成功価の関係) が幼児に正確につたわったかどうかは疑問を残し、今後、危険性が高いほど成功によってより大きな報酬がはつきりと与えられる事態を設定した上で、この点を再度検討する必要がある。

いずれにしても本実験では、Type A 者の要求水準の高さが幼児期の子どもたちに認められ、要求水準の高さが Type A 形成の最初から備わっている要素であることが示唆された。児童期の子どもたちでの Kliever & Weidner (1987) の結果と本実験の結果の違いが何に由来するのか明らかではないが、とにかく要求水準の発達についての研究が少なく、今後 Type A が形成されて間もない時期でのこの特徴を広くつかむ必要がある。また、この方向での研究が、成人の Type A 特徴の理解

にも、Type A の形成過程の究明にも、大きく寄与するものと考えられる。

引用文献

- Corrigan, S. A., & Moskowitz, D. S. 1983 Type A behavior in preschool children: Construct validation evidence for the MYTH. *Child Development*, **54**, 1513-1521.
- Friedman, M., & Rosenman, R. H. 1959 Association of specific overt behavior pattern with blood and cardiovascular findings. *Journal of the American Medical Association*, **169**, 1286-1296.
- Friedman, M., & Ulmer, D. 1984 *Treating Type A behavior and your heart*. New York: Fawcett Crest.
- Gastorf, J. W., Suls, J., & Sanders, G. S. 1980 Type A coronary-prone behavior pattern and social facilitation. *Journal of Personality & Social Psychology*, **38**, 773-780.
- Kliever, W., & Weidner, G. 1987 Type A behavior and aspiration: A study of parents' and children's goal setting. *Developmental Psychology*, **23**, 204-209.
- Matthews, K. A., & Angulo, J. 1980 Measurement of the Type A behavior pattern in children: Assessment of children's competitiveness, impatience-anger, and aggression. *Child Development*, **51**, 466-475.
- Ovcharchyn, C. A., Johnson, H. H., & Petzel, T. P. 1981 Type A behavior, academic aspirations, and academic success. *Journal of Personality*, **49**, 249-256.
- Price, V. A. 1982 *Type A behavior pattern: A model for research and practice*. New York: Academic Press.
- Snow, B. 1978 Level of aspiration in coronary and noncoronary prone adults. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 416-419.
- Yamasaki, K. 1990 Parental child-rearing attitudes associated with Type A behaviors in children. *Psychological Reports*, **67**, 235-239.
- 山崎勝之・菊野春雄 1990 日本語版幼児用 Type A 検査 (MYTH) の作成 心理学研究, **61**, 155-161.

——1991. 2. 28. 受稿, 1991. 9. 14. 受理——